

キルケゴールの思想における「匿名」の表現形式と発表形式

——それは「質的実存弁証法」と、「いかにしてキリスト者になるか」という

真理の「直接——間接伝達」において必然性をもつ——

黄 綿 杞 行

本論は匿名形式がキルケゴールの真理伝達の間接伝達と質的弁証法において「必然的」であることを明らかにするものであるが、その論点と展開において、「匿名」と個人的状況、社会的状況との関係と「匿名」の学問的根拠を、彼自身の実存経過に従って、「匿名」との出会いから個人的社会的ないしは学問的宗教的諸経験を経て匿名形式が發展、確立されるのを辿りたいと思う。

匿名——期——一八四一年、二八才迄。匿名と三つの契機▽

Ⅰ ソクラテスとキルケゴールの非類似点

「あれか||これか」、「彼の美的『宗教的実存』を『ギリシア的『キリスト教的』」、「ソクラテス||キルケゴール」と規定することはあながち無禁な対比とは思えない。⁽¹⁾又は、ソクラテスとキルケゴールの類似点は、特に非類似に存する。⁽²⁾彼の学位論文『イロニーの概念』では、「イロニーとして解釈されたソクラテスの立場」⁽³⁾に両者が存することは確かであろうが、世界史に登場したイロニーの現象形態から言えば、ソクラテスのそれはイロニーの「第一現象形態」⁽⁴⁾即ち同時代の思想、道德秩序に対する無限的絶対的否定性の立場において「全体性に対して主体性の権利を主張したこと」⁽⁴⁾にある。即ち、ソクラテスのイロニーは始まりであり終りであったのだが、キルケゴールは、実はイロニーの「第三の現象形態」⁽⁵⁾として、「イロニーがキリスト教といかに関わるか」の期待をもっていたのである。学位論文書き始めの

頃の日記に「哲学のイデーは媒介である『キリスト教のイデー』は逆説である」と述べ、テーゼで「キリストとソクラテスの類似点は、特に非類似点にある」として、「キリスト教」と「哲学」との相違を決定的に知るのである。従って『イロニーの概念』は著作活動における「青年時代」と「壮年時代」又は人生の「前半」と「後半」とを区切る正に「転回点」と言える。⁽⁶⁾つまりソクラテスのイロニーを自らの内に深化させる期待が、「匿名」との出会いであり、その意味で「匿名」期（初期）⁽⁷⁾とすることができるよう思われる。彼の最後の論文『瞬間』誌第十号（死後、兄刊行）でも「私に課せられた務めはソクラテスのな務めである」と念を押している。しかしあくまで両者の類似点は「目的」な類似にとどまる。ソクラテスは絶対的否定性の故に自らをイロニーに捧げる結末となり、キルケゴールの言う「イロニーは近代人の場合、本質的に倫理に帰せられる」ことから、倫理的存在の極地であり、「躓き」であった。キルケゴールのそれは、キリストとの「同時性」にエネルギーを発するのである。これは、絶対的否定性を包摂しながらも、質的に最大の矛盾である「同時性」を飛躍によって啓示体験されるものと思われる。ここに、イロニーがキリスト教にいかに関わるかの「第三現象形態」即ち同時性的実存としてとらえられるはしないだろうか。そうであるならば「第三形態」の形式として匿名形式という真理の間接伝達を確立していたといえる。

2 レギーネ事件は匿名（形式）の契機であり、実存規定である

『イロニーの概念』が書き始められる時を同じくしてあのレギーネとの婚約が始まり、提出されると間もなくその破棄が行なわれ、答弁が終ると最後の別離が行なわれた。⁽⁷⁾この事実から、論文とレギーネ事件の関係（特に「破約」の真相）を究明する必要がある。⁽⁸⁾破約の理由として、(一)キルケゴールは肺結核であったらしいこと、(二)彼の「憂うつ」はレギーネをもその中に巻き込み現実の愛をおびやかしていたこと、(三)しかし、決定的には「キリスト教のイデーは逆説（匿名）である」という基本的イデーのもとで自己反省する時、無限に深い問いをつきつけられたのである、という「信仰説」に尽きることと思う。⁽⁹⁾こうしてレギーネとの「時間」の中の愛を断念することにより、「憂うつ」を媒介として「永遠」の人として愛し続けるのである。まさに愛する故に別れるのである。これは逆説であり匿名である。つまりイロニーとして解釈されたソクラテスの立場が彼の中に導入されることとレギーネとの離別は、（当然この事件が彼を社会の白眼視の下にさらす事を理解した上で）彼の実存理念において一致するのである。しかし、愛するレギーネにだけは「何故破約したか」と「変わらぬ愛」を知ってもらいたい。それはレギーネを傷つけない唯一の方法で（匿名の間接伝達）である。彼の日記に「私に間接伝達を教えてくれたものは、実は彼女に対する私の関係である」と言う。このことが、「匿名」形式の『あれか、これか』、『反復』、『人生行路の諸段階』等の初

期作品に配慮されている。しかしこれはあくまで匿名の「段階」であって、以後多様化する匿名の表現形式の全的根拠をもたないのである。

3 彼の憂うつは匿名（形式）の媒介である

「哲学のイデーは媒介である」という彼において、「憂うつ」は彼自身の実存の「媒介」である。「媒介」は質的弁証法的（構造）範疇に存し、実存と著作において匿名形式をとる。故に、キルケゴールの「憂うつ」は匿名への媒介である、といえないだろうか。

4 匿名期の結論

(一)『イロニーの概念』における「キルケゴールとソクラテスの類似点」はイロニーとして解釈されたソクラテスを、その絶対的否定性の深化のもとで、キリスト教との関わりを見出す迄に発展させた「非類似点」にある。つまりソクラテスのイロニーを媒介としてキリスト教のイデー（逆説（匿名））を信仰することであり、ここまでは、学問的に追求された「匿名」である。

(二)レギーネ事件は『イロニーの概念』の実験的結論であり、キリスト者に対する神の試み又は実存規定である。即ち、匿名の実験であった。

即彼の憂うつも又匿名への媒介であるということ。

以上三点を総合すると、彼が青年時代と訣別して著作活動時代へと移行する転回期において既に「匿名」は単なる「契機」とか「媒介」として留まる範疇ではなく、キリスト教的真理実験において、必然的と言いかげないと思う。

註 (1)福島保夫「ギリシヤとキルケゴール」『実存主義』四九号三頁。(2)『イロニーの概念』テーゼ一に「キリストとソクラテスとの類似

点は、特に非類似点に存する」とある。(3)『イロニーの概念』第一部テーゼである。(4)大谷愛人『続キルケゴール 青年時代の研究』

(以下『続青年時代の研究』と略す) 一五七四頁以下。(5)第二の現象形態にドイツ・ロマンティックの立場をあげている。(4)と同書の

一五七五頁。(6)『続青年時代の研究』（第三部第十六章・第五節「この論文の意義」）一五七六―一五七七頁。(7)『続青年時代の研

究』一五七八頁。(8)J・ホーレンベアやC・ヨーアンセンもこの問題を扱っている。(9)『続青年時代の研究』一六〇二頁にC・ヨー

アンセンの研究成果を引用。(10)『続青年時代の研究』（「破約の秘密」）一六二三―一六二九に参照。主に病氣説を始めとする外面

説、憂うつ説、信仰説等の内面説、これらの単一説から総合説迄多様である。

匿名Ⅱ期Ⅰ一八四二—一八四六年（三才迄）。匿名の多様化と発展—「形式」と「内容」の「二重性」√（著作の匿名諸形式は末尾の付録に記載する）

この時期の著作『あれか、これか』では五人、『反復』では二人、『人生行路の諸段階』では十人もの匿名作者を登場させている。加えて「製本屋ヒラリウスにより蒐集、印刷、出版」に代表される如く、刊行者にも匿名を使用する。匿名形式で、これは最もこつている。表題で「表現形式」と「発表形式」の同義的用語を意図的に区分して標示したのは、匿名筆者の二重性にとどまらず、筆者と刊行者という二重性において展開していると言えるし、この形式は内容との一致を理想として、全著作の「本名著作」と「偽名著作」の弁証法的二重性へと展開する。⁽¹⁾その結果、遠ざかるのは実作者名であるが、読者に接近するのは諸匿名に象徴される諸々のイデーである。諸匿名は具体的個人の内に見出しえない理想的典型の模倣であり、諸典型は弁証法的構造をもって主体的自覚を刺激するのである。（諸著作の弁証法的構造を詳述することは重要であるが紙数の制限から割愛させてもらった。⁽²⁾）

ここで「匿名」、「偽名」、「匿名」の用語を規定しておきたい。第一に「偽名」と「匿名」の質的相違—「匿名」(inkognito)とは現象と本質を分離させ、その主体を識別不可能にしての他者との接近、交わりの姿である。その意味で私服刑事にたとえられよう。「匿名」は識別不可能にするという点で前者と一致するが、しかし他者からの逃亡であり、変装の犯人といえよう。それ故に「匿名」は「忍び(姿)」、又は「微行」ともいう。では「だれが忍び姿(匿名)になろうとするのか」、もちろんキルケゴールである。ソクラテスから継承されたイロニー即ち自己否定の力と微行の姿のキリストを「およそ最も深い匿名」として、真理伝達の模範とする力とが交叉している状態、これが実存領域における匿名の意味である。ところが彼の「個人は内面性であり、墓場までもである」その様な個人が、他者へ忍びこむには、直接的でなく間接伝達でなくてはならない（間接伝達の必然性は後で詳述する）。結局キリスト教的実存の範疇では「匿名」は「偽名」と明確に区別されるべきである。

「匿名」とは彼が典型的理念に付した仮りの名であり、「仮りにAとしこちらをBとし…」といった程度の意味である。キルケゴールは「匿名の諸著の中には、私自身の言葉はただ一つもない。だから、もしだれかがこれらの著書から個々の言葉を引用しようと思うことが万一にもあるなら、どうか各々の匿名の著者の名で引用してほしいものだ。」（『後書への付録』）と述べている。多くの匿名が完き蹟きの可能性を孕みつつ実存的弁証法的極限に立たされる一貫した構造を匿名と言いうるのである。この様に規定した上で、狹義的に「表現、発

表の匿名形式」、広義的にはキルケゴール自らその内にある「実存的弁証法又は質的弁証法或いは間接伝達」を指して使用しているのである。

この「匿名」は「同時性」と共に、キルケゴールのキリスト像の中心をなすもので、このことはⅣ期で論ずることとする。匿名Ⅱ期の特徴を知るには『後書』が詳しい。これはキルケゴールの実存思想を哲学形式で論じたもので「ヨハネス・クリマクス著、キルケゴール刊」という形式をとり、表題通り著作活動の「完結」のつもりであったが、次節でふれるコルサル事件で新たな著作家としての課題即ち「虚偽なる大衆」「虚偽なる匿名」⁽⁵⁾と単独にして真理の匿名と対決することになる。こうして同書で完結すべき美的倫理的著作から転回して宗教的著作活動を展開するのである。⁽⁶⁾

註 (1)『続青年時代の研究』一四〇―一四〇二頁。(2)古くはジョンソン『キルケゴール理解の鍵』菅岡吉訳、最近では、N・トゥルストルプ『キルケゴールのヘーゲルとの関係』(一九六七)G・マランチューク『キルケゴールにおける弁証法と実存』(一九六八年)等がある。(3)『実存主義辞典』(東京堂刊)、一五六―一五七頁。(4)工藤綏夫『キルケゴール』(清水書院刊)、一七五頁。「『あれか、これか』の中の「誘惑者の日記」の著者、ヨハネスは『人生行路の諸段階』に再登場する享楽の人で『おそれとおのき』で「沈黙のヨハネス」となり、自己を深め更に真理の頂点に登りつめる『後書』のヨハネスとなる。」(5)ヘルマン・ディーム(岩永達郎訳)「セーレン・キルケゴールに仕えるスパイ」『キルケゴール著作集、別巻、キルケゴール研究』一四四―一五八頁。(6)工藤綏夫『キルケゴール』一四二頁以下。

匿名Ⅲ期八一八四六―一八四七年(三四才迄)。コルサル(Korsar)事件は大衆において虚偽であり、単独者において真理である匿名の試練▽

事件の原因は『人生行路の諸段階』への悪意に満ちた批評文が『大地』という雑誌に載ったことである。その執筆者はメラー(P. L. Müller)で彼は有力な諷刺新聞「コルサル」にも関係していた。キルケゴールは雑誌『祖国』(一八四五年十二月二十七日、第二〇七八号)に、「一刻も早くコルサルの船上にのせてほしいものだ。デンマークの文筆界においてコルサルにやつつけられないほど優遇さ

れているのは自分一人かと思うと、この哀れな著作者はまことに肩身の狭い思いがする」と反駁し、「P・L・メラーのあるところそこに
 コルサル紙あり」と挑戦した。⁽¹⁾「コルサル」の主宰者ゴルスメットは翌年一月二日の同紙第二七六号から七月十七日の第三〇四号
 迄、執念をかけて嘲笑文と諷刺画を連載した。こうして世間から「たった一人の人(単独者)」となったキルケゴールは、田舎牧師としての
 の静かな生活への期待又は墓場まで隠された内面性の真理又は思弁的なものとの対決から転じて「大衆及びその匿名的行為(マスコミの暴
 力)は虚偽である」という時代批判の精神の萌芽を期して、「偽匿名」と対決する外向的内面性こそ真理であると考えたに違いない。そこ
 に真の信仰のあり方を決意する時、彼は**大衆の迫害を覚悟した殉教の位置に立ったのである**。コルサル事件は「いかにしてキリスト者と
 なるか」において『後書』に代表される「ヨハンネス・クリマクス」Johannes Climacus の立場、即ち哲学迄の立場から『死に至る
 病』、『キリスト教の修練』の匿名「アンティ・クリマクス」Anti Climacus の立場、即ち信仰の行為の立場へと転回する主要契機といえ
 よう。それ故『後書』以後、従来の如き純然たる匿名著作はひきこもるのである。匿名の第一の蹟きは、隠れない忍び姿への転向に発展す
 る。既に、匿名がいかに巧緻であつたにせよ、デンマークのほとんどはそれがキルケゴールであることは十分知っていたようである。この
 事実は何ら匿名から必然性を導く理由とはならない。何故なら彼は著作活動のみの匿名でなく、実に自ら匿名的実存の日々を生きていたの
 である。つまり著作と実存両面の匿名の二重性である。⁽³⁾これは、殉教的真理実験の困難が、「同時性」とほぼ同概念と思われる「キリスト
 教的啓示の直接伝達を、ソクラテス的間接伝達の中に入れることにあつた」⁽⁴⁾のであり、予見された躓きと思われる。

註 (1)「フラーテル・タキトウルヌス」の仮名で発表。この仮名は、『人生行路の諸段階』の第三論文「責めありや、責めなしや?」の著
 者である。(2)「当時デンマークに自由主義政治導入の運動があり、ジャーナリズムは**大衆**を真理の決定者となした。キルケゴール
 はこのことを時間的事柄に関しては認めるものの、宗教的真理に関しては**大衆**は真理とは本質的に正反対であり、従つて『大衆
 』は虚偽、不真理である」と規定する。『キルケゴール研究』(『著作集』別巻白水社刊、大谷愛人「キルケゴールの真理の問題」)
 四五頁。(3)「私は試験人間である」という様に、「レギーネ事件」、「コルサル事件」、「アドラー事件」、「教会批判」等材料
 を枚挙するに不自由しない。(4)『キルケゴール研究』(ヘルマン・デイム「神に仕えるスパイ」)「五二一六〇頁」。

匿名Ⅳ期八一八四八年—一八五〇年(三七才迄)。匿名のクリマクス——宗教的著作に深化されて、

新しい匿名「アンティ・クリマクス」⁽¹⁾は「ヨハンネス・クリマクス」と対比して採用されたもので、キリスト教界の虚偽を指摘する為の宗教的著作である。従って前期迄の多様な匿名はもはや不要となり、多くの匿名の弁証法的展開の中で必然的に選ばれた匿名である。「私は自分をヨハンネス・クリマクスよりは高くアンティ・クリマクスよりは低くあるものとして規定する」⁽²⁾と述べていることから、アンティ・クリマクスは既に最高の真理に登りつめ、そこから絶望した人間に悔い改めを迫る立場であり、正に信仰者の確信あふれる行為である。これは当時国家そのものと同一の権威であった国教会の批判であり、その代表的著作である『死に至る病』、『キリスト教の修練』刊行には「殉教」を決意せねばならなかった。⁽⁸⁾アンティ・クリマクスの模範は殉教者キリストであり自らは追従者となるのだ。

彼にとって「現在」は、神が卑賤の姿で世に現われ処刑された啓示の時と、神が再び世界に君臨し審判する終末時との「中間時」である。「中間時」において神は微行(匿名)である。だからアンティ・クリマクスの信仰はキリストとの「同時性」⁽⁴⁾にある。信仰のあり方は匿名的でなければならない。匿名は即ち「直接—間接伝達」である。本定稿「倫理的伝達の弁証法と倫理的宗教的伝達の弁証法」⁽⁵⁾で詳述しているが、訳者大谷愛人の同稿解説に「キリスト教伝達はまず一番最初は知識の伝達であり、それから次に能力の伝達となる」と言う。なぜなら倫理的伝達の場合は教師に権威はなく、教師は学ぶ者に対して産婆という在り方をしなければならぬからである。しかしそれだけで終わってしまうものではない。キルケゴールはキリスト教の中に産婆術的なものを見いだしたのが自分の功績であるとなし、最初にまず知識の伝達が行なわれたなら、その後は産婆術的な方法で能力の伝達が行なわれなければならない。そこでキルケゴールは倫理的伝達を間接伝達となしキリスト教的伝達を『直接—間接伝達』⁽⁶⁾としている。この故に彼は、キリスト教的伝達を単に宗教的伝達と呼ばず倫理的、宗教的伝達と呼んでいる。⁽⁶⁾これからも先述した「イロニーの第三現象形態」がはつきりと認められる。純然たる匿名著作は倫理的伝達の弁証法により間接伝達であり、実名著作(講話集)はキリスト教的知識の伝達弁証法により直接伝達であり、「アンティ・クリマクス著、キルケゴール刊」の匿名形式は彼独自の所謂「倫理的—宗教的伝達」の弁証法により「直接—間接伝達」となる。彼の著作とその匿名形式の質的二重性が弁証法的に必然であったことも理解できよう。「それなら何故実名著作で匿名性をそこね様とするのか」という疑問は解明される。

註 (1)語源はギリシア語κλινμαξで「椅子」^(はし)の意味。ラテン語Clinaxは「絶頂」「最高潮」を意味する。そしてⅣ期匿名形式は、「アン

ティ・クリマクス著、キルケゴール刊」に代表される。(2)『武装せる中立』（『遺稿集』第六卷、理想社刊）、大谷愛人訳編の二九七―二九八頁でアンティ・クリマクスとキルケゴール自身との関係を説明している。(3)両書はもとと一体のもので、前者はキリスト教信仰の前提としての罪の自覚を、後者はその救済を主題とするものである。(4)『実存主義』第四九号（伊藤之雄「キルケゴールと聖書」）二〇―二二頁、「実存弁証法の極限が史的イエスとの緊張関係と対決を経て、一種の啓示体験（キリストの同時性）へと止揚される。」(5)『遺稿集』第六卷、理想社刊。(6)、(5)四五六―四五八頁。

匿名Ⅴ期八一八五一年―一八五五年（四二才迄）。匿名は敗北したか勝利したか

当期著作にほとんど仮名使用をみない。これは一大転回である。かわって「予期しうる自己の死」の自覚に立ち、生前に出版すべき著作とその必要ないものを選別するのである。前者は『自己試練のために、現代にすすめる』『祖国』誌投稿、更に単独出版の『瞬間』誌一九号等⁽¹⁾によって、激しい国教会との直接的（実名）論戦を展開する。この行為は、墓場迄の内面性である個人―その単独者の従来の匿名行為と矛盾する様に思われる。しかし彼は既にキリストとの同時性において殉教の追従を決意したのであり、「ヨハンネス」と「アンティ」の中間に位置する彼が正にそのクリマクス（最高）の躰きを、内的に飛躍して「アンティ・クリマクス自身」となることに違いない。だから「顕われた内面性」はむしろ「隠れた内面性」の飛躍であり、匿名行為の極限と言えないだろうか。又殉教の決意は次の点にも関係する。『後書』で匿名著作者をして間接伝達又は匿名を弁明しているが、今となつては匿名的信仰のみが問題で弁明等二義的である。だから匿名の解題と言える『わが著作活動の視点』（脱稿）や『倫理的伝達と倫理的―宗教的伝達』『武装せる中立』（予定稿）等出版しなかったものも多い。⁽²⁾こうして匿名は彼の死を以って地上的実存において敗北したかもしれぬが、キリスト教的真理において自らの生命を捧げた弁証法的飛躍によって正にキリストと「同時的」であり、匿名は勝利して普遍的となる。

註 (1)十号、脱稿し印刷準備中に倒れた（一八五五年九月二五日）為に直接発行できないまま、永眠した。(2)時既に、遺産底をつき、出版費用に事欠く等という理由は決定的でないと思われる。

〔付録〕 匿名の諸形式

一、著者にして刊行者である時の匿名

『あれか、これか』（ヴィクトル・エレミタ刊行）一八四三年出版、『おそれとおのき』（沈黙のヨハンネス著）、『反復』（コンスタンティン・コンスタンティウス著）以上二冊一八四三・一二・六出版、『不安の概念』（ヴィギリウス・ハウフニエンシス著）一八四四出版。

二、著者にも仮名、刊行者にも仮名

『人生行路の諸段階―数人の筆者による研究―』（製本屋ヒラリウス編集、印刷、出版）一八四五。

三、仮名著者と実名刊行

『哲学的断片』（ヨハンネス・クリマクス著、S・キルケゴール刊行）一八四四出版、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』（ヨハンネス・クリマクス著、S・キルケゴール刊行）一八四六出版、『死にいたる病』（アンティ・クリマクス著、S・キルケゴール刊行）一八四九出版、『キリスト教の修練』（アンティ・クリマクス著、S・キルケゴール刊行）一八五〇出版。

四、雑誌・新聞等への寄稿匿名論文

『遍歴審美主義者の活動』（フラーテル・タキトゥルス）『祖国』第二〇七八号（一八四五・一二・二七）所載。

五、実名の著者であり刊行者

『教化的講話』（一八四三・五・一六出版、『二つの教化的講話』以来一八五一・八・七出版『金曜日の聖餐式における二つの講話』に至る）、『いまなお生ける者の手記より』一八三八、『アイロニーの概念について』一八四一、『J・L・ハイベルク刊『日常物語』の作者の小説『二つの時代』に対する文学評論』一八四六・三・三〇、『自己試練のために』一八五一・九・一〇出版、『瞬間』第一号～九号一八五五・五・二四～九・二五

六、存命中出版されなかった著作、未定稿。